

科学系出版における文理接続

話題提供者：石田勝彦

0. はじめに

現在「文理接続プロジェクト」で扱われている「文系的あるいは理系的な知見や問題関心」や議論は、「いかにも大学人のものだ」というのが、企業人である私の率直な感想です。もちろん、それが良いとか悪いとかの話をしたわけではありません。企業人の立場は、大学人のそれよりも非論理的で、営利意識や組織内外の人間関係といった「グチャグチャしたもの」を当然加味したマネジメントが要求される世界です。その世界でも「文系的あるいは理系的な知見や問題関心」はあり、両者の違いが浮き出る場面がありますので、今回はそのような事柄について科学系出版の立場から話題提供するつもりです。しかし、もし話し手と聴き手の間に何か「違和感」が生じるとしたら、それはもしかしたら、文理の接続によるものというより、大学人の感覚と企業人の感覚の接続によるものかもしれないとも思います。それは私にも予期できない要素ですので、話題提供をするにあたって「二重接続」の可能性のあることを、あらかじめ指摘しておきたいと思います。

1. 話題提供：「サリン事件」

科学が関わる大事件や大事故が起こった際、科学雑誌の記事に話題を取上げることがあります。そのようなケースでは、科学的な事柄が社会的な事柄と密接に絡んでいることが多いので、出版社の人間も文理接続的(?)な体験をすることがあります。その一事例として、「サリン事件」について話題提供します。

【前提知識：サリン事件のあらまし】 サリン事件とひとくちに言っても二つの事件に分かれます。一つは1994年6月27日に長野県松本市の裁判官宿舍付近で毒ガスのサリンがまかれた「松本サリン事件」。もう一つは、翌1995年3月20日、東京の地下鉄千代田線、日比谷線、丸の内線内で同時多発的にサリンがまかれた「地下鉄サリン事件」です。

サリンは、そもそもは戦場で使う化学兵器として開発された毒ガスですので、事件当時、国内化学者の多くもその名前すら知りませんでした。そんな特殊な危険物質が街中の一般市民に対して初めて使われた化学兵器テロ、それがサリン事件でした。

松本の事件当初、犯人は不明でしたが、やがて、オウム真理教という宗教団体が国家転覆をもくろんで起こした組織的犯行であることがわかり、1995年3月の教団施設への一斉強

制捜査から教祖らの逮捕、長期にわたる裁判、残る逃亡犯の逮捕を経て、2018年7月、教祖ら死刑囚13人全員の死刑執行をもって一応の幕引きが図られました。

2. 科学系出版としての関わり

1994年の事件直後から、月刊誌「現代化学」では、サリンなどの神経毒について特集を組みました。その後、実行犯の一人である中川智正死刑囚と毒物専門家 Anthony Tu 博士との面会を通じて明らかになった科学兵器製造に関する専門的内容について継続的に記事を掲載し、さらに、死刑囚本人による手記(解説記事)を、おそらく日本の科学雑誌としては初めて掲載してきました。散発的ではありますが、出版活動を通じて20年近くもこの事件と関わることになった顛末を述べます。

3. 科学系出版を通じて感じた「文と理」

事件に関する一連の出版物を刊行するなかで感じ、考えさせられた以下の論点について簡潔に話題提供します。

1. 科学的知見を社会へ伝えることの功罪
2. 社会的問題関心と科学的問題関心の相違
3. 裁判での事実追及と科学的事実追究の相違
4. 高学歴で理性ある理系人がなぜ宗教テロに走るのか

これら各論点に関しては、私自身、未だ明確な見解にたどりついていません。参加される皆様の専門的見地からのご見解をうかがえればうれしく思います。未解明の点が多く残る本事件は、まだまだ風化させてはならないものです。この話題提供が、文理接続の議論を深めるきっかけや題材となれば幸いです。